

館報 教育記念館

No.68

平成19年3月 発行

平成18年度

アイデア・ロボット・フェスタ

中学生・高校生・高専生によるロボット展
& チャレンジデー



◀ロボットづくり教室(半日コース)
「ワンセンサーライトレーサー製作」
小学5、6年生 21名参加

ロボットづくり教室(1日コース)▶
「ロボカーの製作」
中学生 14名参加



展示ロボットの
デモンストレーション



チャレンジデー 開会式でのデモンストレーション

主な内容

- ◎教育時評 富山県教育委員会 生涯学習・文化財室 室長 中西 彰 …………… 2
- ◎恒例展 「教職員厚生会退職厚生部富山支部会員作品展」
「みんながんばってます作品展」
「富山県造形教育作品展」
「富山県中学校美術展」…………… 3
- ◎わが校の歴史から ★滑川市立西部小学校 …………… 4
★小矢部市立大谷小学校 …………… 5
★礪波市立礪波東部小学校 …………… 6
★朝日町立朝日中学校 …………… 7
- ◎「学ぼう！ふるさと未来」支援事業報告会
平成19年度の展示計画、あとがき …………… 8



発行所/財団法人 富山県ひとづくり財団 富山県教育記念館 〒930-0018 富山市千歳町1-5-1
☎(076)444-2000 ☎(076)444-2001 E-mail:toyama@t-hito.or.jp http://www.t-hito.or.jp
(教育記念館会議室ご利用の場合 ☎(076)433-2770)
発行人/富山県教育記念館 館長 齊藤和夫 印刷所/株式会社宮越印刷



地域デビュー

富山県教育委員会 生涯学習・文化財室
室長 中西 彰

堺屋太一氏が「団塊の世代」を上梓したのが昭和51年。戦後のベビーブーム(昭和22年～24年)に生まれた世代—約800万人という大きな人口ボリューム—がちょうど働き盛り期にさしかかっており、善くも悪くも我が国の意思形成に大きな影響力を持っていたことを背景に、彼らが日本の将来にもたらすものを推測して書かれた小説であるが、30年が過ぎ、彼らがいよいよ退職を迎えようとしている今、その推測はかなりの部分であたっている。

昨今の様々なメディアが発信しているところによれば、その団塊世代が第一線を退いた後に期待されているものは実に大きいものがある。退職金で膨らんだ財布の中身を狙った様々な誘惑、長年職人として身につけた技術の伝承を望む声、都会へ出ていた人々に対する里帰り定住願望等、地域社会はこの軍団のリタイヤーを手ぐすね引いて待っている。

教員OBも例外ではないようで、従来からも多くの先輩に講師として授業のお手伝いをしていただいているが、近年は、依頼される業務内容も多様になってきている。授業のお手本を示さなければならなかったり、深夜に及ぶ電話相談に応じる役割であったり、なかなかたいへんなようである。そうはいっても相手は子ども、身についた情熱が沸々と湧いてきて、たちまち、期待された以上の成果をもって応えることができるはずである。

一方、町内会長や自治会の幹部役員に祭り上げられたり、公民館長を依頼されたりといった場合については、対応は分かれるようだ。この分野に長けた方もいらっしゃるが、30数年間、学校と家を往復するばかりで、近所づきあいもままならなかった人にとっては、この種の仕事はなかなかたいへんらしい。職員会議での議論の流儀をそのまま持ち込

んだり、教室という一国一城の主として君臨した心理状態から抜けきれないまま村の長老と丁々発止を始めて掣蹙を買うなど、失敗例も多いと聞く。何事においてもデビューは困難を伴うものであるが、教員の地域デビューは当事者の事前の予想が楽観的なことが多いだけに、トラブルに陥りやすいのである。

かといって、過剰に身構えたり、始めから逃げの姿勢をとったりするのは、いかがなものか。せっかくの地域の“人財”、大いにその能力を発揮すべきである。成功の秘訣は、はじめからむずかしい課題に取り組むことを考えず、日常的なことから始めることである。例えば、ゴミ出しをしながらか挨拶を交わしたり、共同清掃などで積極的に対話を試みたりして、地域にとけ込むことから始め、その内に能力が評価され、徐々に責任ある仕事が回ってくるといった自然な形が望ましいのでないか。

また、この機会に今までゆとりがなくて取り組めなかった生涯学習に生きがいを見いだすのもひとつの道であるが、この面でも、従来とは違うアプローチが望まれている。これまでの生涯学習は、趣味の時間であったり、カルチャー的な講座であったり、少し専門的な講座でも受講しただけで満足していた嫌いがあるが、これからの時代は受講した内容を地域に還元したり、場合によっては講座の企画や運営に積極的に取り組んだりといった人材を育成するとの方向性が打ち出されており、こういった人材の輩出を大いに期待している。

今年度末は、いわばプレ団塊世代ということだが、まずはこの一団が先陣を切って地域デビューのお手本を示すことができるかどうか、本格的な大量退職時代の日本の進む道を左右すると言っても過言ではない。

第22回 教職員厚生会退職厚生部富山支部会員作品展

平成18年10月20日（金）～10月29日（日）

絵画の部28点、写真の部11点、工芸の部17点、押し絵の部15点、彫刻の部1点、書の部11点、盆栽の部3点、景石・盆栽の部2点、計88点の作品を展示。他の恒例展では見られない様々な分野の作品が並べられ、日ごろの精進の程を感じさせる作品展でした。来館鑑賞者数は399名で特に本年度は、旧友会会員ばかりでなく、家族連れや出品者の知人の方々の鑑賞も目立ちました。



第24回 みんながんばってます作品展 平成18年11月4日（土）～11月19日（日）



県内の特殊教育諸学校14校から、平面作品133点、立体作品111点、計244点が展示されました。絵画、デザイン、工作、手芸、写真、工芸など一人ひとりの児童・生徒にあった素材や題材を使ってのユニークな作品ばかりでした。

「自分の思いを自由に表せる作品をたくさん見ることができて、ますますの成長を楽しみにしています」「著名な作家展を多く見てきたが、ここでの作品の訴えるものがシンプルでむねをうちます」などの感想が寄せられました。

第18回 富山県造形教育作品展 平成18年11月24日（金）～12月10日（日）

富山県造形教育連盟、富山県、富山県芸術文化協会が主催し、県内の幼稚園や保育所、小学校、中学校、高校の幼児・児童・生徒の造形作品が展示・公開された作品展でした。壁面はもちろんのこと、床面にも所狭しと大型作品が展示され、賑やかな楽しい作品展となりました。

2日目の25日（土）には、「つくりだす喜びを味わう美術教育」をテーマとした富山県造形教育シンポジウムが開催され、活発な研究協議が行われました。



第17回 富山県中学校美術展 平成19年2月13日（火）～2月26日（月）



県内79公立中学校から選ばれた平面作品135点、立体作品47点が展示されました。

「生徒たちの作品とは思えない、豊かな感性にあふれ、表現の素晴らしさに感動しました」との感想が寄せられるなど、質の高い作品展でした。

作品の集積、展示、撤収そして搬出と、設営担当の先生方にはたいへんお世話になりました。





にこにこ花、
ほかほか花、
きらりん花、
— 三つの心の花を咲かせよう

滑川市立西部小学校



<校区の概要>

本校は、滑川市の西加積地区に位置している。もともとは農村地帯であったが、近年、道路の整備、新しい住宅団地の造成、様々な業種の大型店の進出など急速に市街地化が進み活気あふれる地域となっている。新しい町内の誕生だけでなく、住宅やアパート等の建設も盛んで、それに伴い新入学児童数も増加してきている。本校の児童数は平成10年度までほぼ300人前後だったものが、平成11年度以降急激に増え続け、今年度は18学級で540名(平成18年5月1日現在)となっている。

また、校区には、児童館、行田公園、市営テニスマ場、市営野球場などの社会教育施設も整備されており、子供たちもよく利用している。地域の教育力の低下が叫ばれている昨今であるが、校区の人々は、地域の子供は地域で育てるという意識が高く、学校にも大変協力的である。

<学校の概要>

明治7年7月9日、下梅沢の黒田耕三氏宅を借りて、沖田新、上島、上島新、上梅沢、有金、大門、下梅沢、菰原、江尻を校区として廉平小学校が創立し、今年度で132周年目となる。その後、西加積尋常小学校、西加積国民学校、西加積小学校等を経て、昭和52年現在地に新校舎が完成し、滑川市立西部小学校と改称された。

児童数の急増により、平成17年8月に新しい普通教室棟が竣工し、同年9月から全校児童が新しい教室で学ぶことができるようになった。新校舎は教室の壁を取り払い、木材を多く使用し、広いワークスペースやワークテラスがあり、多様な教育を支える学習空間を実現している。また、子供参加のトイレづくりを目指し、トイレワークショップや絵タイル製作を行った。

平成18年6月から既設校舎の大規模改造工事・耐震補強工事(第一期工事)が始まっており、平成19年6月の竣工が待たれる。なお、平成20年度からは第二期工事が予定されている。

<本校の教育>

本校では、「にこにこ花、ほかほか花、きらりん花、三つの心の花を咲かせよう」を子供たちの合い言葉に、学校教育目標「まなびあい、ふれあい、かがやきあう西部っ子」の育成に向けて努力を続けている。「あいさつをかわしあい、心の通い合う学校や地域にしよう」、「ボランティア活動に取り組み、豊かな心を育てよう」、「自分ががんばれることを見つけ、きりと輝こう」という子供たちの思いや願いを大切にしている。

平成14年度には全国視聴覚教育研究会滑川大会を市内の他の3校と共に開催した。本校では、以前から情報教育に取り組んでおり、グループウェアであるスタディノートというソフトを学習に使っている。子供一人一人の考えや思いを焦点化したデジタルポートフォリオ作りを行い、互いに見合う場を設定することは、自他のよさに気づき、自信をもって活動しようとする子供を育成する上で大変効果的である。

平成16、17年度は、文科省の豊かな体験活動推進事業を行った。生活科や総合的な学習の時間などで体験活動を多く取り入れるとともに積極的に地域の人材を指導者として招いた。その成果を生かし、今年度も野菜作り、地域探検、米作り体験など様々な学習でご協力いただいた。その他、本の読み聞かせ、ゲートボールの指導、宿泊学習での登山指導など様々な場面で地域ボランティアに支援していただいている。地域の教育力を生かした学校づくりに今後も取り組んでいきたい。



地域と共に歩み、
地域と共に輝く学校

小矢部市立大谷小学校



<校区の概要>

本校は、桜町遺跡やメルヘン建築に代表される歴史とメルヘンの街、小矢部市の東部に位置する。校区は、松沢、正得、荒川、若林の4地区からなり、校区にあるクロスランドタワーから俯瞰すると、緑豊かな農村地帯を東海北陸自動車道、国道、県道などの幹線道路やJ R北陸線が縦横に走っている様子が一望できる。校区の学校への関心は高い。学校・家庭・地域連携推進会議が中心となって子育て講演会を開催したり、各地区に子供見守り隊を設立したりするなど、地域の子供は地域の手で見守り育てようとする意気込みが強い。

<学校の概要>

本校は、昭和40年に松沢、正得、荒川、若林の4小学校を統合し、翌41年に現在の地で創立された。校名は、校区出身の大実業家で、市に貢献のあった大谷米太郎氏、その弟で本校創立に貢献された大谷竹次郎氏に因んでいる。前庭には竹次郎氏の銅像があり、創立以来子供たちの成長を見守っている。また、図書室には竹次郎氏の子息である大谷勇氏より寄贈された大谷記念文庫が設置されている。こうしたことから、本校は、米太郎氏、竹次郎氏、勇氏それぞれの信条である「一心」・「努力」・「報徳」を大谷精神とし、創立以来、児童育成の根幹として受け継いでいる。

これまで、2度の文部省の道徳研究指定を始め様々な研究指定を受けている。最近では、文部科学省の学力向上フロンティアスクールや県の幼・保・小ふれあい事業推進校の指定を受けている。また、全日本健康推進学校すこやか賞、大谷科学

賞なども受賞している。

<特色ある取り組み>

本校は、長年、家庭・地域との連携のもとに豊かな心を育む教育を大切にしている。その一つに「あいさつ」「ありがとう」「あとしまつ」「あせ」の4つの「あ」で始まる「しあわせ」運動がある。平成2年から続けられており、朝から元気のよい挨拶をしたり、清掃奉仕に励んだり子供たちに定着している。

また、異学年交流と自然体験を通して思いやりの心を育てるために、サツマイモ栽培を実施している。苗の植え付けから収穫までの世話を縦割り清掃グループで行っている。登校した児童から一斉にペットボトルで水やりに励む姿は、よく働く本校の児童を象徴している。収穫したイモの一部は、日頃お世話になっている方々に感謝の気持ちを込めて届けている。

積極的な地域人材の活用や地域との交流も本校の特色の一つである。文部省の「総合的な学習推進事業」指定以来、源氏太鼓や篠笛などのクラブ活動だけでなく総合的な学習の時間を始めとする様々な学習の場面で地域の方の援助を得ている。また、地区の高校生との農業体験や地域にある施設へのボランティア活動も活発である。

本校は、これまで地域と共に歩み、地域に支え見守られながら教育活動推進に当たってきている。子供たちの輝く姿を目指して、さらに、家庭・地域との連携を深めていくことを考えている。





散居の緑に囲まれ
元気な砺波っ子を
はぐくむ

砺波市立砺波東部小学校



<学校の概要>

砺波市の春は、散居村の中にチューリップの色じゅうたんが敷き詰められ、みごとな田園空間を呈する。そんな景色のど真ん中に砺波東部小学校が居を構える。校区には、庄川が流れ、さらにチューリップ公園や花総合センター、四季彩館、市美術館などを擁し、子供たちをとりまく自然・文化の環境は申し分ない。

昭和36年に、旧庄下小学校、旧庄西北部小学校、旧油田小学校を合わせて、砺波市初めての統合小学校として発足した。市として初めての3階建て小学校で、田んぼの中に浮かぶ白亜の大船のようであったと古者は語る。

昭和50年ごろから学校周辺に宅地造成がなされ、一戸建て家屋の集合団地が増えてきた。平成16年度にはついに児童数800人を超え、県内有数の大規模小学校となった。

これまでにおよそ5000人の卒業生を送り出してきた校舎も、いよいよ手ざまになり老朽化してきたので、このたび建て替えることになった。折しもこの3月23日に新校舎への入校式を行い、平成19年度から使い始める。ゆったりとしたオープンスペースのある校舎となる。

<本校の教育>

本校は開校以来、道徳、体力づくり、生活科、心の教育、学習指導法の改善と研究を続けてきた。平成17年度からは、文部科学省の研究推進校として「確かな学力の育成」という大きな課題解明のために、学校・家庭・地域が一丸となって研さんを積んでいる。学力育成とはいえ、知・徳・体のあらゆる

角度から子供の学力の向上を図っている。

まずは「朝6時に起きてしっかり朝食を食べる子供80%」という指標を掲げ、実践をしている。朝食はごはん、おつゆ、おかずの3種類を摂ることにしているが、現在達成率は67%である。快眠、快食、快便で基本的な生活習慣を身につけ、基礎体力を付けることに力を入れている。もちろん保護者との連携を図っているが、PTA活動として、手軽で栄養のある朝食レシピの募集をして会員に紹介している。

次の指標は、「友達やお客さんに進んであいさつをする子供80%」である。2月の達成率は66%である。学力向上には、しっかり学習しようとする心になっているかどうかが大切である。みんなが「おはようございます」と気持ちよくあいさつして、一日のよいスタートを切りたいものです。規律を守る態度の育成も重要で、全校集会や全校合唱を多く取り入れて鍛えている。

体調を整え、心を落ち着かせてこそしっかり学習する基盤が整う。そして学習の基本である「相手の目を見て話を聞く子供80%」の指標の達成を目指している。2月の達成率は86%であった。「聞く力」の次は「聞き取る力」そして「聞き解く力」へとステップを進めていきたい。

学力向上の近道はないが、基本的なことをきちんと押さえて、向上を図っている。

純農村の小学校としてスタートした本校も、時代とともに姿を変え、新校舎がめざす「地域開放型のエコスクール」で子供たちは、きっと大きく伸びてくれることを期待している。



町に一つの 中学校として

朝日町立朝日中学校



<校区の概要>

本校は、町に唯一の中学校であり、校区は朝日町全域である。そのため、保護者や地域住民の教育に対する期待は大きい。

朝日町は富山県の東端部にあり、新潟県との県境に位置している。海・山・川に恵まれ、海拔0メートルから3000メートルまであり、その約60%が「中部山岳国立公園」と「あさひ県立自然公園」に指定されている風光明媚な町である。

朝日町の歴史はとても古く、旧石器時代に始まったと言われており、数多くの遺跡が発見されている。不動堂遺跡では縄文中期の最大級の竪穴式住居跡が発見され、また約1500年前の宮崎浜山玉づくり遺跡からは、ヒスイの原石を加工した勾玉(まがたま)、管玉(くだたま)などが出土している。江戸時代は、越中の東縁という地理的条件から関所が設けられ、街道筋は交通の要衝となり、宿場町として栄えてきた。

昭和29年8月、1町6村が合併し、名峰朝日岳にちなんで「朝日町」と名付けられた。

最近では、ビーチボール発祥の地として、またヒスイの町としても有名である。

<学校の概要>

本校は、昭和57年4月、泊中学校と小川中学校との統合により朝日中学校として開校した。開校当時は900人近くの生徒数であったが、現在はその半分以下の417人となっている。学校教育目標は、「思いやりのある生徒」「強い身体を鍛える生徒」「たゆみなく学ぶ生徒」であり、開校当時から25年間受け継がれている。

文部科学省(旧文部省)や県教育委員会からの研究指定も多く、生徒指導研究推進校、格技指導推進校、郷土教育推進校、ボランティア活動普及推進校、学校健康づくり研究推進校、勤労生産学習研究推進校、環境保全活動実践モデル校、中高一貫教育推進校、学力向上支援事業指定校など、たくさんの研究実践を行ってきた。

今年度は、「あいさつ」「掃除」「歌」「学習態度」の4つのキーワードのもとに取り組んできており、少しずつ成果を上げている。また、部活動も盛んで、全国大会の常連校となっている柔道部を始め、多くの部活動が実績を上げている。

<特色ある教育活動>

(1)中高一貫教育

本校は、県立泊高等学校と連携型の中高一貫校として、平成11年度に文部省の指定を受け、さらに14年度からは町単独事業として継続して取り組んでいる。教科(国語、数学、英語)の研究や総合的な学習の時間の交流、生徒指導部の連携、部活動・生徒会活動・進路学習・行事(芸術鑑賞会や学園祭など)での交流を行ってきた。今年度から新たに、泊高等学校普通科の観光ビジネスコースと連携し、地域を学ぶなかから豊かな郷土愛をはぐくみ、人間性の向上を図ることを目標に活動を行っている。

(2)勤労生産学習

本校は平成6年度から2年間、文部省の指定を受け、勤労生産学習を行ってきた。その伝統を今も引き継ぎ、1年生は花壇整備、2年生は畑作、3年生は稲作の体験活動を行っている。そして、11月には収穫した米や農作物で調理した給食をいただき、お世話になった農協関係や農家の人を招いて収穫祭を行っている。

(3)登山

開校間もなくから2年生が1泊2日の立山登山、3年生が2泊3日で郷土の最高峰である白馬岳への登山を行っていた。途中から2年生で白馬岳登山を実施し、日程的な面から1泊2日になったり、朝日岳登山に変更になったりしたが、20年以上も続いている伝統的行事である。ここ数年は、自然災害や天候不良により、中止になったり、立山登山に変更になったりしているが、心身を鍛え、郷土を愛する心を育てるためにも続けていきたい行事である。

「学ぼう!ふるさと未来」支援事業の報告会開催

平成19年2月21日(水) 富山県教育記念館 51会議室 15:30～



射水市立中伏木小学校

伝統芸能(庄西子供獅子)の伝承と、絶滅危惧種であるフジバカマの保護・栽培活動を全校的に展開した結果、「ふるさとのいのち」を守り伝える活動が展開できた。来年度は児童数減少のため、子供獅子の参加を2年生からとして継承し、「秋の七草園」栽培活動も継続していきたい。



南砺市立井口小学校

椿学習を「育てる」「調べる」「交流する」「表現する」の4観点で進めた。保小中一貫としたその取り組みは、来年で10年目となる。実生、植え替え、取り木などの活動、親善大使としての大島(東京都)訪問などを継承してきた。今後も、ふるさと井口を愛する心を育てる実践を続けていきたい。



富山市立清水町小学校

3年生「清水町発見」、4年生「ぼくら清水町調査隊」、6年生「もっともっと〇〇清水町」などのふるさと学習や、異世代交流集会、感謝の集いなど様々な実践活動を続けてきた。今後とも地域に対する理解や願いを深めるための実践を工夫し、続けていきたい。



射水市立金山小学校

「ふるさと金山」を題材とした3年生「すすめホテル探検隊」「いくぞハクチョウ探検隊」、6年生「猿楽小(東京都の姉妹校)との交流の歴史を調べ伝えよう」などの学習を通して、ふるさと金山を愛する心を育んできた。今後は地域の方々に環境保全を訴える活動にも取り組んでいきたい。



富山市立古沢小学校

地域の自然、歴史的遺産(古沢用水、杉谷霊水、古墳、遺跡等)、伝統的文化(獅子舞等)、公共施設(ファミリーパーク)等を活用し、特色ある学習を展開することができた。今後とも魅力的な地域素材の効果的な活用の在り方や地域への情報発信の在り方を探る実践を展開していきたい。

平成19年度の展示計画

- ◆特別展「自然に育まれたとやまの教育」 4月21日(出)～6月1日(金)
- ◆第26回「富山県版造形教育作品展」 6月9日(出)～7月8日(月)
- ◆「マセマティカル・ワールド展」 7月15日(月)～9月9日(月)
- ◆第4回「子どもの目、自然不思議発見写真展」 9月24日(月)～10月14日(月)
- ◆第23回「教職員厚生会退職厚生部富山支部会員作品展」 10月19日(金)～10月28日(月)
- ◆第25回「みんながんばってます作品展」 11月4日(月)～11月18日(月)
- ◆第19回「富山県造形教育作品展」 11月24日(出)～12月9日(月)
- ◆「アイディア・ロボット・フェスタ」 12月15日(出)～1月27日(月)
- ◆第18回「富山県中学校教育美術展」 2月9日(出)～2月25日(月)
- ◆「富山大学学生卒業記念書展」 2月29日(金)～3月9日(月)



あとがき

恒例展を鑑賞しに1階多目的ギャラリーを訪れた方々はその展示内容の素晴らしさに感動され、「どうしてもっと宣伝されないのですか。」とよく感想を述べられます。この館報を作成しながら痛感することしきりです。